

<研究論文>

英語学習個別化指導のためのアセスメント項目に関する一考察

飯島睦美

本論文では、英語教育改革が進む流れの中で、小学校、中学校や高校の通常学級における英語学習現場を調査・観察し、英語学習につまずきやすい学習者が少なからず在籍しているという事実を確認したうえで、教師が全ての学習者の能力を向上させるための個別化指導を工夫、検討、決定する際に考慮すべき重要な項目を、学習者の認知能力の観点（学習者の感覚優位、認知特性など）から考案し、提案する。

【キーワード】英語学習, 個別最適化, 認知特性, アセスメント

1. はじめに

総務省統計局は、2023年5月、人口推計から算出した子どもの数を発表した。15歳未満の男女は2023年4月1日時点で前年より30万人少ない1435万人となり、1982年から42年連続で減少し、過去最少を更新した。(統計トピックス No.137. 我が国のこどもの数―「こどもの日」にちなんで―) 総人口に占める子どもの比率は前年より0.2ポイント低い11.5%になった。

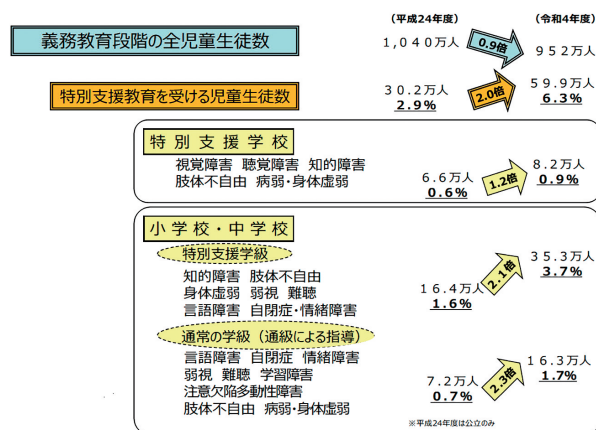


図1. 文部科学省「特別支援学校等の児童生徒の状況」
(<https://www.mhlw.go.jp/content/001076370.pdf>)

本論文は、2021年から2022年において筆者が行ってきた講演や雑誌『英語教育』（大修館）に掲載した依頼原稿の内容を再度検討し、まとめたものである。

また、国連によると、人口が4000万人以上の36カ国中、日本の子ども比率は最低と報告された。（日本経済新聞、2023年5月4日配信）こういった中、政府は一般会計の歳出総額が112兆700億円となる2024年度の予算案を閣議決定し、少子化対策を打ち出したものの、少子化の歯止めがかかるといえる楽観視はできないのが現状であろう。このような少子化に伴い、学校教育現場においては、学校の統廃合がすすみ、通常学校および学級数は減少の一途である。しかし、その一方で、図1に示す通り、特別支援学校数、特別支援学級数および通常学級に在籍しながら通級教室に通う児童生徒数が増加しており、この10年間で倍増している。

また、図2は、2020年度における「通級に通う児童生徒数」の推移を示しており、年々増加傾向にあることがわかる。ここで、留意すべき点は、この数が表している児童生徒は、通常学校に在籍している児童生徒であり、普段は定型発達の児童生徒とともに同じ教室で授業を受けているが、ある特定の科目については、他の児童生徒と同様の授業では学習に困難が生じる場合、個別の指導対象となるということである。

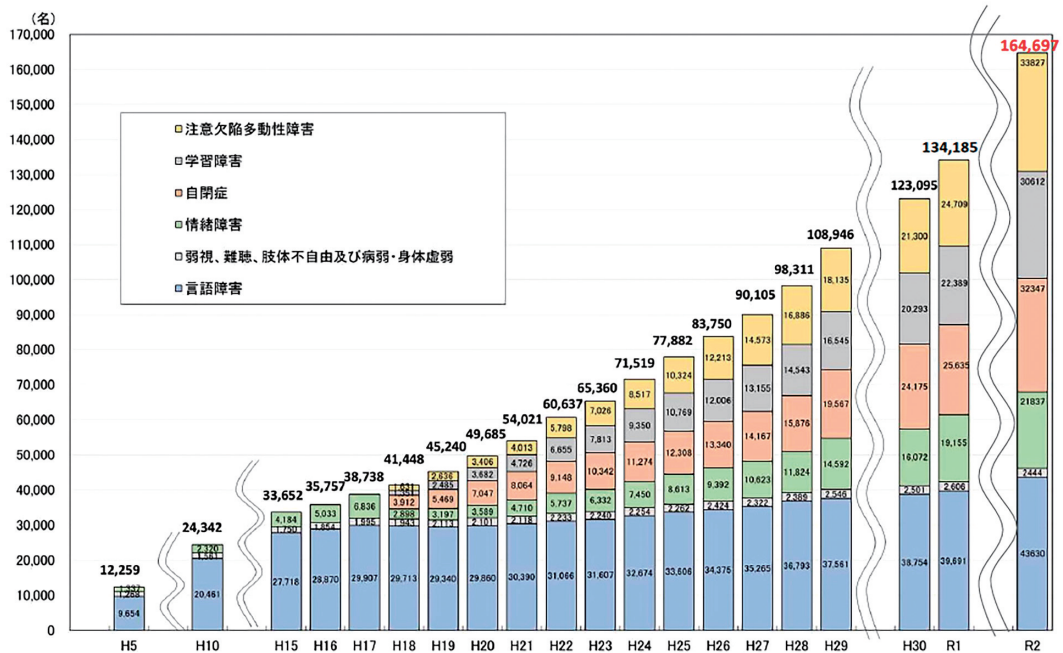


図2. 文部科学省「通級による指導を受けている児童生徒数の推移」

(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/1402845_00008.htm)

「ユニバーサルデザイン教育」、「インクルーシブ教育」ということばは、すでに現在の教育現場ではよく耳にされているが、上述のとおり、一つの教室の中に、個別の指導を必要とする児童生徒が年々増加している現状から判断すると、この「インクルーシブ教育」の実践がいかに重要で、必須であることが理解できる。

少子化や個別の支援を必要とする児童生徒数増加傾向の中で、英語教育改革が進められ、2020年度

から小学校、2021年度から中学校、そして2022年度から高校において学習指導要領が改訂され、それぞれの校種において、学習内容や言語活動が高度になってきている。この傾向が通常学級の一定数の学習者に英語学習の苦手感を増幅させてはいないだろうか。次の章では、英語学習において学習者が感じる難しさを、指導者や学習者本人がどの程度、どのように気付いているのかについて考察する。

2. 英語学習におけるつまずきへの気づき

教師にとって、目の前の学習者が学習に難しさを感じているのに気づき、その難しさを生じさせている原因を把握した上で、介入指導を行うことは、「だれひとりも取り残さない教育」の観点から理想的なことである。しかし、実際には、英語学習に難しさを感じやすい学習者が抱くもどかしさは、周囲には気付かれにくい。また、教師のみならず、学習者自身ですら、自分が持つ英語学習への苦手感をもたらす原因に気付かないままに、英語学習に果敢に挑んでいるケースも少なくない。

ここでは、学習者が抱く難しさやもどかしさが周囲に把握されにくい実態の例を確認する。

2. 1 指導者側から見えにくい学習者のもどかしさ

中学校2年生125名に対して、標準テスト「教研式標準学力検査 NRT」（辰野千壽 他，図書文化社）と英単語の読み書き評価 URAWSS-English（村田美和 他，atacLab）を実施した。

NRT は、一般的な英語の標準学力テストであり、次の4部から構成されている。

第1部	聞くこと	10分	19問
第2部	話すこと	11分	18問
第3部	読むこと	13分	15問
第4部	書くこと	11分	18問

設問方法は、選択問題が63問、括弧埋め問題が4問とオープン回答問題が3問の合計67問で構成されている。

URAWSS-English は、以下に示す通り、大問4つから構成されている。

第1問	英単語を日本語に訳す	20問
第2問	教師によって音読された、第1問と同じ英単語を聞いて訳す	20問
第3問	日本語をアルファベット文字を使って英単語に訳す	20問
第4問	第3問と同じ問題だが、カタカナでの発音回答を許可	20問

第1問と第2問は、問題として使われている英単語は同じであるが、第1問の場合、生徒が自らの力で英単語を音韻符号化し解答することが求められている。一方、第2問の場合、音韻符号化の作業

を教員が行うため、生徒自身がアルファベットで記載された英単語を音韻符号化できなくても、教員によって情報処理プロセス上にある音韻符号化の作業が肩代わりされることになる。

第3問と第4問においても、使用されている日本語の単語は同じものである。しかし、第3問では、アルファベットで英単語を綴ることが求められ一方で、第4問ではアルファベットで解答が難しい場合、カタカナでの解答が許されている。そのため、発音さえ分かっていたら解答できることになる。

第1問と第2問、第3問と第4問の正答数の差を出すことで、次のような学習者が持つ困難が浮かび上がる。

- 差が大きければ大きいほど、英語のアルファベット文字の音韻認識の力が弱いことが疑われる。
- 差が大きければ大きいほど、読み書き障害の可能性があることが疑われる。

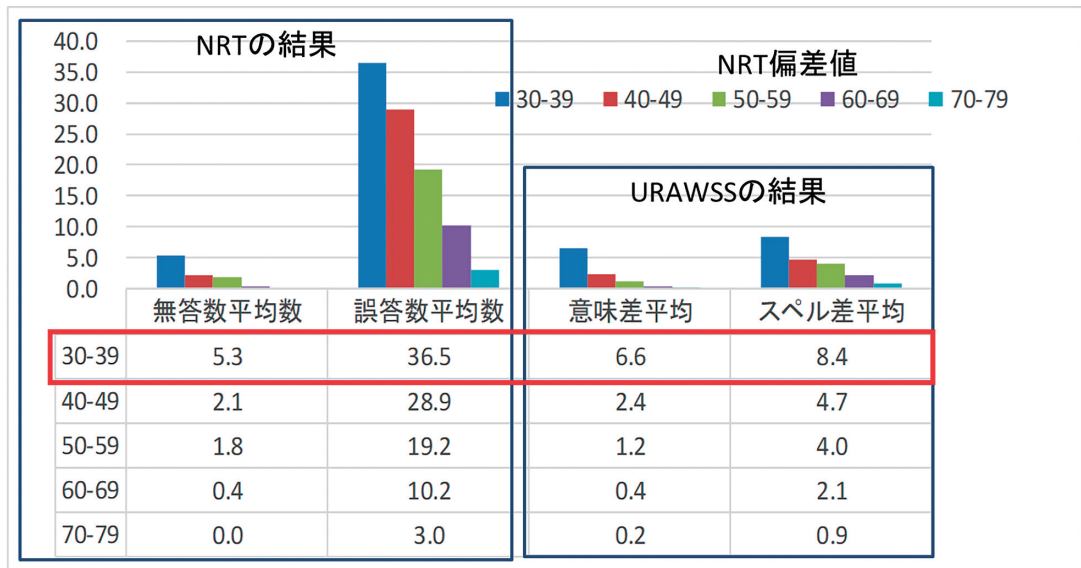


表1. NRTの偏差値によるURAWSS結果分析(飯島・村田, 2018)

表1. には、NRTの結果から各生徒の偏差値を出し、偏差値毎にURAWSSの「差」の平均を示している。この表1が示す通り、NRTの偏差値が低い学習者集団ほど、URAWSSにおける第1問と第2問、第3問と第4問の正答数の差が大きいことがわかる。偏差値の高い生徒たちは、音韻認識に問題がなく、自ら音韻符号化ができるので、それらの「差」が小さいこととなる。

この結果から、英語標準テストの偏差値の低い学習者は、英単語の音を聞けば、すでにインプットされている英単語が想起されて、それによって日本語訳も思い出されるが、英単語だけを見ては、音韻符号化が困難なために、すでに知識の中に入っている英単語と残念ながら結びついていかない。また、アルファベット文字を使って、英単語を綴ることはできないが、その英単語の音はわかっている

場合が決して少なくないことが観察された。こういった特性を持つ学習者たちは、「本当はわかっているのだが、点数につながらない」という英語学習上のもどかしさを抱えていることが、この結果より観察できる。我々教師も、普段実施している英単語テストの結果だけからは、こういったことに気づくことができていないのが現状であろう。

2. 2 アルファベット文字学習レディネスをチェックする必要性

2020年4月、新学習指導要領のもと、小学校3年生からの英語活動そして5年生からの教科としての英語授業が開始された。さらに、「音」中心であった小学校での英語活動から、評価対象となった英語授業では、「文字の導入」や「書く」といった活動も取り入れられ、児童が「アルファベット文字」を扱う場面も増えてきた。

母国語である日本語文字のひらがなやカタカナそして漢字は、小学校入学とともに学習が始まり、小学校3年生からは「生活言語」から「学習言語」としての位置づけが確立されてくる。実際、小学校3年生は、児童にとって非常に重要な時期である。英語活動の開始以外にも、「本来、アルファベット文字を使って日本の事象を海外に伝えることを目的としたローマ字」の学習が国語の授業の中で行われる。また、「情報」の授業もはじまり、ローマ字入力によるタイピング練習も平行して行われる。しかし、この時点で、子どもたちの中には日本語文字の読み書きにも難しさを持っていることが見過ごされているケースも多く、そのような状態の児童にさらにアルファベット文字学習が課せられることとなっているのが現状である。

そこで、本研究では、小学校5年生105名を対象として、アルファベット文字とカタカナ文字の定着度確認テストを実施し、児童の文字学習レディネスを観察した。

対象 : 小学校5年生105名 (令和2年9月実施)

テスト内容: 第1問: アルファベット聞き取り選択

使用文字: f, b, c, n, q

第2問: アルファベット書き取り

使用文字: p, d, h, j, m, b, s, f, g, z

第3問: カタカナ書き取り

使用文字: ア, サ, ン, ヌ, ネ, カ, セ, シ, ソ, ツ

まず、第1問では、アルファベット1文字をスライド上で5秒間提示し、その後5秒間をおいて、次のスライドで正答と4つのディストラクターを示し、同じ文字を選択して番号で解答してもらった。ここでは、事前の調査で間違いが多く見受けられた判別しづらい文字「f, b, c, n, q」を使用した。

次に、第2問では、聞こえてくるアルファベット文字を書く問題で、p, d, h, j, m, b, s, f, g, zの10個の文字を使用した。こちらも、事前の調査で書き間違いが多く観察された文字

をターゲットとした。

さらに、第3問では、聞こえてくる10個のカタカナ文字を書いてもらった。カタカナ文字は、事前の調査で書かれた文字の形状が整っていないものや誤りのあった「ア、サ、ン、ヌ、ネ、カ、セ、シ、ソ、ツ」を使用した。

結果は、カタカナ文字の書き間違いが1問でもあった児童が36名おり、その中でも間違いの数が9問、8問、6問や5問と多くのカタカナ文字を書き間違えた児童がそれぞれ1名ずつおり、これらの児童にとっては日本語文字の習得も完璧に成功しているとは言えず、この状況でさらにアルファベット文字の学習を加えていくことは、児童にとって負荷となり、少なからず困難があると予想できる。

表2に示す通り、カタカナ文字の書字に1問でも間違いのあった児童群と全問正解の児童群を分けて、第1問と第2問のアルファベット文字課題の平均点を計算すると、カタカナ文字書字でつまずきのある児童は、やはりアルファベット文字学習でも問題を抱えていることがわかった。カタカナ文字学習に困難さが観察できる児童は、アルファベット文字導入の際にも同様に困難が予想できると言える。

このように、学習者本人も周囲の者も、学習のレディネスができていない状況に気づかずに、次の段階へ進んでいるケースが決して少なくない、と推測される。よって、小学校3年生での英語活動が開始される前の小学校2年生の時点で、児童全員を対象として、今回実施したような簡易テストを行い、つまずきが予想されるような“at risk”の児童に対しては、早い段階からの介入指導を行い、英語活動、英語授業と連携をとることが有効である、と考える。

カタカナ書き取り	①アルファベット聞き取り選択平均点 (5点満点)	②アルファベット書き取り平均点 (10点満点)	カタカナ誤答数:人数
間違いあり(36名)	2.8	6.4	9問:1人 8問:1人 6問:1人 5問:1人 4問:1人 3問:4人 2問:6人 1問:21人
間違い無し(69名)	4.5	8.9	

表2. カタカナ文字定着とアルファベット文字定着の関係

2. 3 英語学習の「中1ギャップ」

筆者が高校2年生の英語を苦手とする生徒35名に対して実施した調査の中で、「英語に苦手感があるのはなぜか?」という質問を行い、回答を自由記述で求めた。様々な回答がなされた中で、回答者の7割が異口同音に挙げた理由は、「中学校1年生の時の英語の指導がよくなかった」といった内容であった。この意見の背景には、学習者自身も気付いていない問題がある、と予想される。

従来小学校における英語活動では、「音」中心の活動が行われ、児童は楽しく英語を使った活動に参加してきた。英語学習に対するイメージも楽しいものであったにちがいない。ところが、中学校入学後、文字ありきの英語授業が開始されるやいなや、それまで顕出されずくすぶっていた読み書き

の難しさが急に表出されてくることになり、とたんに英語学習が困難なものとなってしまうのではない。

Wydell & Butterworth (1999) は、このように実際に読み書きに関する問題を抱えていても、それが表出されにくい現象を「言語の粒と透明性」という観点から説明している。表3に示す通り、英語圏と日本では、読み書き障害 - ディスレクシアの発生率が大きく異なっている。研究者にもよるが、英語話者では概ね10～15%、日本語話者の間では1.8～7%が発生するとされている。日本人が英語圏の人々と生物学的に大きく異なっているとは考え難く、なぜこのように発生率に大きな違いが生じているのかは大変興味深い。この点を、Wydell (Ibid.) らは、英語と日本語の言語特徴の違いから考察している。まず、「粒」つまり音の最小単位について、英語は音素から単語が構成されており、「粒」が小さい。(例：“dog”という単語は、/d//o//g/という3つの音素で成り立っている。) 一方、日本語は、最小単位が音節となっており、英語のそれに比べてより大きいものとなっている。(例：「かた」は、「か/k・a/」と「た/t・a/」という二つの音節から成り立っている。) さらに、「透明性」の観点では、文字と音の関係について論じられている。英語では、一つのアルファベット文字が複数の音に対応しており、例えば“a”という文字は、単語によっては、apple /æ/ と発音されたり、take/ei/ と発音され、「透明性」が低いと言える。しかし、日本語では、「は」が/ha/または/wa/ と発音されることを除いては、1文字1音の対応となっており、「透明性」が高い。こういった文字と音の対応関係が単純であるか複雑であるのかが、その言語の文字と音の関係の習得つまり音韻認識力に影響するという。

よって、「粒」が小さくて、「透明性」の低い英語という言語は、文字と音の関係が捉えにくく、読み書き障害が顕出されやすいが、一方、「粒」が大きくて、「透明性」の高い日本語のひらがなやカタカナは、英語ほど文字と音の関係の習得が難しくなく、その点から、例え学習者に読み書き障害があったとしても、日本語を使って言語活動が行われている限り、難しさが表出しにくい、という。

英語圏： 10～15%	アルファベット文字 ・音の最小単位が小さい： dog: d/o/g ・文字と音の対応が複雑： apple take
日本： 1.8～7%	ひらがな・カタカナ ・音の最小単位が大きい： かた:か/た: ka/ta ・文字と音対応が1対1： おかあさん あか

表3. ディスレクシア発生率の違いの要因 —英語と日本語—
(Wydell & Butterworth, 1999, 筆者作図)

このことから、日本人の英語学習者の間でも、実は読み書きの難しさを抱えていても、日本語中心の言語活動が行われている間は、その難しさが表出せず、本人も周囲の者も気づかずにいる状況が続き、中学校入学後、文字ありきの英語学習が始まったとたんに、英語学習につまずいてしまう現象が現れる。小学校まで楽しかった英語学習が突然難しいものに豹変してしまい、学習者からすると、その原因を自らの原因以外に探そうとし、「中学校1年生の時の英語の指導がよくなかった」と結論づけてしまうのではないか。これは、英語学習の「中1ギャップ」と言えよう。この「ギャップ」に陥る前に、自分の読み書きの難しさに気付いていれば、それなりの対応と準備をして、中学校での英語学習を始めることが可能となると期待できる。

では、どのようにして、自分の読み書きの難しさに気づけるのであろうか。

2. 4 ギガスクール構想教室環境における個別最適化の可能性

2019年12月19日、当時の萩生田光一文部科学大臣は、「子供たち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育 ICT 環境の実現に向けて～令和時代のスタンダードとしての1人1台端末環境～」というメッセージを発信した。その内容は、「1人1台端末環境は、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない公正に個別最適化された学びや創造性を育む学びにも寄与するものであり、特別な支援が必要な子供たちの可能性も大きく広げる」というもので、実際の教育現場に最適且つ有効な施策であるかと期待された。

だが、実際には、1人1台貸与されている端末は、授業や学習の個別最適化に生かし切れていないのが現状である。文部科学省が全国の都道府県および市町村に対してアンケートを実施した「GIGAスクール構想に関する各種調査の結果（2021年8月）」によれば、課題として「学校の学習指導での活用（701/1761団体、39.8%）」「教員のICT活用指導力（631/1761団体、35.8%）」「持ち帰り関連（568/1761団体、32.3%）」が挙げられている。

さらに、この1人1台端末を「個別最適化された学び」に効果的に活用するためには、目の前の児童生徒一人ひとりのつまずきや学びにくさを個別に把握したうえで、端末に個別に対応できる教材が組み込まれていることが前提となる。ギガスクール構想によって、全国の教育機関に整備された1人1台端末に、学習者の状況を評価するアセスメントに併せて、このような教材がインストールされている状態こそが、理想的な学習環境といえよう。

では、学習状況を簡易的評価する項目には、どういったものが考えられるのであろうか。

3. 英語学習に難しさのある学習者の認知力

3. 1 言語学習適性

母国語を不自由なく使いこなしている人々にとって、その母国語をどのように習得してきたかなど、深く考えることはあまりない。しかし、外国語学習となるとその習得について悩む人も少なくなく、たまに5か国語操れるといったような人物が紹介されたりすると、羨望的となる。人には得手

や不得手があるものだが、言語の習得にも適性があったりするのであろうか。

Carroll (1973) は、言語学習適性の存在を提唱し、以下の4つの能力を挙げた。

- ・ phonetic coding ability : 音声符号化能力
- ・ grammatical sensitivity : 文法に対する敏感さ
- ・ rote learning ability : 暗記学習能力
- ・ inductive learning ability : 帰納的学習能力

これらの能力を評価する MLAT (Modern Language Aptitude Test) (Carroll & Sapon, 1959) は、学習者の言語学習適性を測るものとして現在もなお改良が重ねられ、使われている。このように言語学習への適性が観察できるということは、逆に言語学習にとって“不向きな”特徴も存在するということになるかと推察できる。

3. 2 言語学習 “不適性”

前項に挙げた4つの言語学習適性能力が不足している、ということが言語学習に向いていないということになると考えられるものの、具体的にどういった項目として把握できるのかを提案できれば、早い段階で、英語学習でのつまずきを予見でき、介入指導が可能となると期待できる。さらに、その介入指導がどれほど効果があるのかを理解できれば、きっと試みる価値を評価してもらえるだろう。

Hattie (2009) には、学習障害児に対する理解力向上のための介入がいかに効果があるかが示されている。ここでは、教育上の138の要因が学力に与える効果を検討した研究のメタ分析の結果をさらに要因ごとにまとめてメタ分析を行い、統合した結果を列挙し、要因ごとに教育的介入として十分な効果が見られるかの評価が示されている。この膨大なデータがまとめられた結果、183あげられた教育的介入の中で、「学習障害児に対する理解力向上のための介入」はその効果が上位から7位と、大変効果のある介入と評価されている。また、Swanson & Lee (1999) によれば、特に効果のある介入には、単語認知、読解、スペリング、記憶・再生、ライティング、語彙、フォニックス、言語のプログラムと言語学習関係が挙げられている。

そこで、次のような仮説を立てて、英語に特に苦手意識を持ち、英語学習上つまずきの観察される生徒への調査を行った。

仮説：英語学習に困難を感じる学習者には、共通した認知的特性が存在するのではないか。

本研究には、理数系科目を得意とするが、英語を大変苦手とする高校2年生3名が参加した。いずれにも、予め、研究目的、内容に関して説明をし、個人情報取り扱いなどについて了承を得ている。

3. 3 方法：WAIS-IV の実施

参加者の認知力を評価するために、WAIS-IV を用いた。WAIS-IV とは、ウェクスラー式知能検査で、全体的な知的能力や記憶・処理能力を測るテストとして世界各国で翻訳されたキットが使用されている。この検査では、以下に示した4つの指標から構成されており、それぞれに下位項目検査があり、標準値とのディスクレパンシーから、指数が算出される。100を基準とし、そこからどれだけ離れているか、によって発達の凸凹が観察され、被験者の認知的強みと弱みが評価される。その結果から、学習上や生活上の難しさを改善するのに、弱い認知力を強みで補って、改善していくことが可能となる。

検査指標

- ・言語理解：単語 類似 知識
- ・知覚統合：絵画完成 積木模様 行列推理
- ・作動記憶：算数 数唱 語音整列
- ・処理速度：符号 記号探し

3. 4 結果

参加者3名の結果を図3に示している。A、B、Cの3名に共通した弱さが3項目に確認できる。「数唱」、「記号」と「符号」の3つの下位項目である。

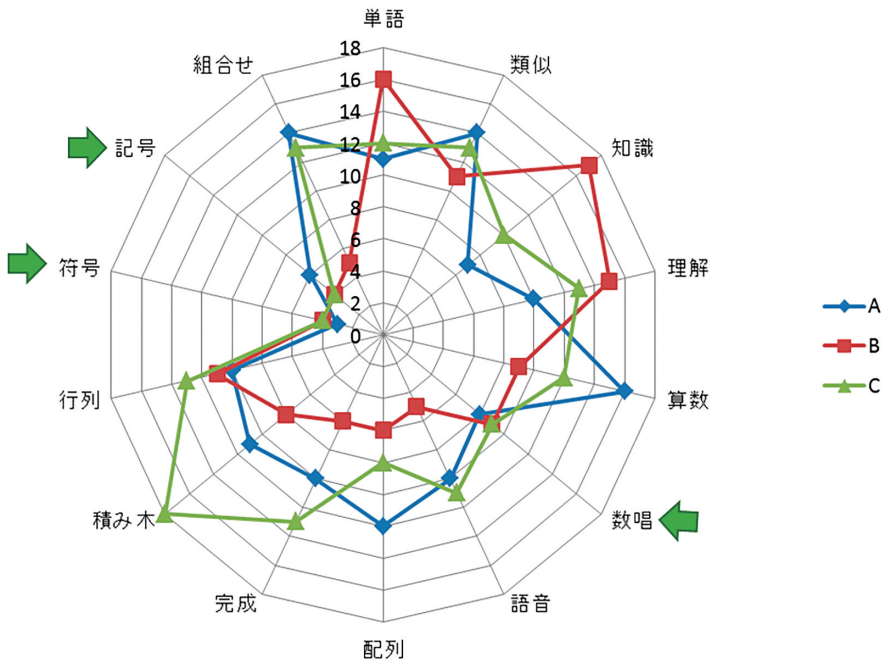


図3. WAIS-IVの結果

4. 考 察

前述した WAIS-IV の結果において、3名の参加者に共通した弱さとして確認された「数唱」、「記号」、「符号」について、これらに弱さがどういった学習上の問題を引き起こす原因となりうるのか、について論じたい。

まず、「数唱」に弱さがある場合、一時的に情報を保持して処理する作業に深く関係するワーキングメモリの容量が少ない、ということが推察できる。これは、外界からインプットされた情報処理に影響を与えることとなる。英語学習活動では、リスニング活動において、音声としてインプットされた音声情報を一時的に保持して、理解する作業が必要であるが、ワーキングメモリが弱いということは、すなわち聴解活動に影響を及ぼすことになる。同様に読解活動においても同様の難しさが現れる。英文テキストの読解作業中、学習者にアイトラッキング器具を装着して観察していると、その視線が英文の同じ場所を行ったり来たりしていることがわかる。つまり、一度英文を読んでも、その情報が保持されず、再度情報をインプットするために一度読んだ箇所から何度も読み返す作業を行っている。また、機械的暗記力の弱さにも関係していると言える。機械的暗記力は、前述した4つの言語学習適性の一つとしても挙げられており、意味のない文字列や数字列を暗記できる力である。

つぎに、「記号」と「符号」に弱さが観察される場合、視知覚や空間認知の弱さが考えられる。このことが言語学習に関係するのは、文字学習である。文字の形を把握しづらい、保持しづらいといった難しさにつながり、文字の定着が遅れる可能性が出てくる。漢字や形の似通った文字などの習得に影響すると考えられる。さらに、「記号」は、刺激となる記号があるかどうかを探すだけ問題であり、作業効率や集中力に関する能力を測定する。「符号」は、見本となる記号を書き写す問題であり、視覚的な認知やスピードに関する能力を測定するものである。よって、処理速度が遅いことにも関連する。運動協応や短期記憶の弱さを露呈する場合もあり、英語学習のみならず、授業中において黒板をノートに写す際の、書く速度と正確さにも影響すると考えられる。また、抽象性に弱い特徴にも関係があり、「曖昧性への耐性」が低いことにもつながる。「曖昧性への耐性」(tolerance to ambiguity)が高い学習者は、第二言語学習において有利であるとも言われている。(白畑他、2009)

以上、WAIS-IVによって観察された、共通した落ち込みは、全て言語学習に関連した認知力であり、ここに弱さがあることで、英語学習のつまずきやむずかしさをもたらしていると考えられる。

よって、ここで観察された「数唱」「記号」「符号」の下位項目を含むアセスメントを英語学習が開始される時点で実施することで、学習者が持つつまずきの可能性を検知し、早期に手立てや介入指導を実施することも可能となると考える。あわせて、それらつまずきのレベルや内容によって、学習者の特性に応じた練習問題が与えられるような授業環境が整えられ、個別最適化の学びの確保につながることにより、ギガスクール構想が真に実現することになる。なによりも、学習者自身が自分の弱点を認識することで、学習方法に工夫ができることにつながり、ひいては自律的学習者の育成にもつながっていくことになると考えられる。

5. 展 望

本論文では、英語学習につまずいている学習者の認知特性を調査し、英語学習を開始する際のアセスメント項目として設定することを提案することを試みた。現時点での課題は、調査データが少なく、結論を一般できないことある。よって、今後、同様の調査を継続し、より多くのデータから分析を深めていくことが必須である。

謝 辞

本研究には、多くの小学生、中学生、高校生そして英語教員の皆さまのご協力を得て、実施した。ここに深く感謝の意を示したい。

本研究は、基盤研究（C）（一般）20K00856の助成を受けている。

参考文献

- Bloom, B. S. (1971). Mastery learning. In J. H. Block (Ed.), *Mastery learning, theory and practice*. 47-63. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Carroll, J. B., & S. Sapon. (1959). *Modern Language Aptitude Test (MLAT)*. New York, NY: The Psychological Corporation.
- Carroll, J. B. (1962). The prediction of success in intensive foreign language training. In Glaser, R. (ed.), *Training research and education*. Pittsburgh, PA: University of Pittsburgh Press, 87-136.
- Carroll, J. (1973). Implications of aptitude test research and psycholinguistic theory for foreign language teaching. *International Journal of Psycholinguistics* 2, 5-14.
- Carroll, J. B. (1981). Twenty-five years of research on foreign language aptitude. In Diller, K. C. (ed.), *Individual differences and universals in language learning aptitude*. Rowley, MA: Newbury House, 83-118.
- Carroll, J. B. (1990). Cognitive abilities in foreign language aptitude: Then and now. In Parry, T. & Stansfield, C. W. (eds.), *Language aptitude reconsidered*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, 11-29.
- Carroll, J. B. (1993). *Human cognitive abilities: A survey of factor-analytic studies*. Cambridge: Cambridge University
- Carroll, B. & Sapon, S. (2002). *Modern language aptitude test: Manual 2002 edition*. Rockville.
- Dufva, M. & Voeten, M. J. M. (1999). Native language literacy and phonological memory as prerequisites for learning English as a foreign language. *Applied Psycholinguistics*, 20(3), 329-348. (<https://doi.org/10.1017/S014271649900301X>. 閲覧日2021/07/11)
- Fuchs, L. S., & Fuchs, D. (1998). Treatment validity: A unifying concept for reconceptualizing the identification of learning disabilities. *Learning Disabilities Research & Practice*, 13(4), 204-219.
- Hattie John, (2009), *Visible Learning: A Synthesis of Over 800 Meta-Analyses Relating to Achievement*, Routledge.
- 箱田裕司, 都築誉史, 川畑秀明, 萩原滋. (2010). 『認知心理学』有斐閣.
- Hattie, John. (2012). *Visible learning for teachers: Maximizing impact on learning*. Routledge.
- 飯島睦美, 村田美和. (2018). 「中学校2年生での英語学習のつまずきを探る—読み書きの困難と言語学習適性能力—」, 全国英語教育学会第44回京都研究大会
- 飯島睦美. (2019.4-2020.3). 「読み書きに困難のある児童・生徒のための英語学習支援」, 『英語教育』, Vol.68, No 1. ~ No.12. 大修館書店

- 井上智義. (2004). 人間の情報処理における聴覚言語イメージの果たす役割—その心理的リアリティを発達と障害の観点からとらえる. 北大路書房
- 今井むつみ, 針生悦子. (2014). 「言葉をおぼえるしくみ: 母語から外国語まで」. ちくま学芸文庫
- Kormos, J. (2017). *The Second Language Learning Processes of Students with Specific Learning Difficulties*. Routledge.
- McLain, D. L. (1993). The MSTAT-I: A new measure of an individual's tolerance for ambiguity. *Educational and Psychological Measurement*, 53, 183-189.
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (2009). 『英語教育用語辞典』大修館書店
- Smith, A. (1996). Accelerated learning in the classroom (school effectiveness). Network Educational.
- Swanson, H. L., Hoskyn, M., & Lee, C. (1999). *Interventions for students with learning disabilities: A meta-analysis of treatment outcomes*. The Guilford Press.
- U.S. Department of Education. (2019). National Center for Education Statistics, Digest of Education Statistics.
- Wen, Z., Biedron A. & Skehan, P. (2016). *Foreign language aptitude theory: Yesterday, today and tomorrow*. Cambridge University Press.
- Wen, Z., Skehan, P., Biedron, A., Li, S. & Sparks, R. (2019). *Language aptitude: Advancing theory, testing, research and practice*. Routledge.
- Wydell, N. T. & Butterworth, B. (1999) A case study of an English-Japanese bilingual with monolingual dyslexia. *Cognition* 70, 273-305.
- 総務省 統計トピックス No.137我が国のこどもの数—「こどもの日」にちなんで—総務省統計局. (2020). 人口推計 (2019年 (令和元年) 10月1日現在). (<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2019np/index.html>. 閲覧日2021/07/11)
- 日本経済新聞 (<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA277ZT0X20C23A4000000/> 閲覧日2023/12/15)
- 日本学生支援機構 (JASSO). (2020). 『令和2年度障害学生支援理解・啓発セミナー障害のある学生の修学支援について』 (https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/index.html. 閲覧日2021/07/11)
- 日本財団. (2018). 『不登校傾向にある子どもの実態調査』 (<https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/information/2018/20181212-6917.html>. 閲覧日2021/07/11)
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課. (2018) 「特別支援教育行政の現状及び令和2年度事業説明」, 令和元年度発達障害支援の地域連携に関わる全国合同会議, 令和2年2月12日開催 (https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/mext_00002.html. 閲覧日2021/07/11)
- 文部科学省「R5特別支援教育の充実について」 (<https://www.mhlw.go.jp/content/001076370.pdf> 閲覧日2022/05/14)
- 文部科学省「通級による指導を受けている児童生徒数推移」 (https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/1402845_00008.htm 閲覧日2022/05/14)
- 文部科学省「GIGAスクール構想に関する各種調査の結果」 (https://www.mext.go.jp/content/20210827-mxt_jogai01-000017383_10.pdf 閲覧日2022/05/14)

A Study of Assessment Items for Individualized Optimization in English Class

IJIMA Mutumi

In this paper, I investigated and observed English learning sites in regular classes at elementary schools, junior high schools and high schools amidst the ongoing trend of English education reform. And I confirm the fact that there are learners who tend to stumble in English learning, and determine important items to consider when teachers devise, examine and determine individualized instruction to improve the abilities of all learners. Devise and propose important items to be considered from the perspective of learners' cognitive abilities.